1

10分で知る
「スペイン語学習のめやす」
（2015年）

第114回TADESKA　2018.2.13
責・柳田玲奈

- 「めやす」の冊子全体を紹介するのではなく、歴史や変遷は割愛し、公開された現物をまっすぐ理解することを目的とする。
- 全部読む時間がなかなか取れない人、全部読んでから時間がたってしまってうろ覚えになってしまっている人などはもちろん、そうでない人たちとも理解を共有したい。

2

「めやす」のエッセンス

1. 学ぶべき文法事項ありき、ではなく、
   コンテクストや実際の使用を念頭に置いた学習項目であるべき

2. 授業を終えてからも**自律して学び続ける学習者**を育てるべき

まずはじめに、とにかく「めやす」がどうしても伝えたい最重要ポイントを挙げると、この2点かと思う。

3

「めやす」の目的 (p.81より)

- レベルと学習内容を記述することによって、日本におけるスペイン語教育の**共通参照基準**を設定する。
- **学習者のニーズ**を考慮に入れ、伝統的な教育に代わる新しい教授法を提案する。
- 文化や機能を学習するための基になり、語彙の学習にも関連付けられるような新しい文法の提示方法を紹介する。
- 日々の授業について立ち止まって考える機会を教員に提供し、今日の学生の**現実**により合った授業運営ができるようにする。

「はじめに」の中から、「めやす」の目的。

- どのレベルでどういうことを学習するべきか、どのレベルで何ができていなければいけないか、誰もが参照できる基準になるということ。
  先ほどのエッセンス2と関係する。
- 言い方を変えれば、伝統的な教育では現在の学習者のニーズに応えられないので、新しい教授法を提案するということ。
  先ほどのエッセンス1と関連する。
- 2点目とも関係しているが、特に文法の提示方法の新たな可能性を提案している。
  エッセンス1と関連。
- 共通参照基準を提示しつつ、「教員の皆さんも自分がやってる授業内容が学生側の需要に合っているかなどを振り返ってみてくださいね」と呼び掛けている。

「めやす」の構成

- 理論的基盤 (pp.13-33, 85-101)
- 「レベル記述文」:レベル1で達成すべき能力を提示 (pp.37, 103)
- 12のテーマ別、「めやす」の実践モデル (pp.39-63, 105-128)
- 検索のための項目別索引 (pp.65-76, 129-138)

「めやす」の物理的構成

- 全138ページ。前半がスペイン語版、後半が日本語版で、基本的に同じ内容。
- どちらも約3割を割いて「理論的基盤 Principios metodológicos」の説明。
- 「レベル記述文Descriptores de nivel」
  各項目において、レベル1つまり初級？で達成すべき能力を挙げている。
  「めやす」は目標を設定してそれを学習者と教師が最初に共有しておくことを重要であるとしている。
  GIDEは最終的にレベル1から4まで設定することを考えているようだが、現段階ではレベル1の作成にとどまっている。（落合佐枝「日本における第二外国語としてのスペイン語授業のための「めやす」作り―学習項目リストとしての「めやす」から言語運用のための「めやす」へ―」南山大学地域研究センター2017年3月地域研究センター共同研究2016年度中間報告『ヨーロッパ言語共通参照枠の現状と今後―初習外国語を中心に―』研究代表者泉水浩隆、pp.81~97）
- 「めやす」を実践するために12のテーマを挙げ、それぞれのテーマにおいて、具体的に授業にどういう内容を盛り込んでいけばよいか、具体的内容例を示している。
  後で実際の使用方法と共に少し具体的に見る。
- 「社会文化項目」や「語彙項目」など項目別に、教えたい機能項目や文法項目からテーマを逆引きできる索引がついている。

5

理論的基盤

第1部　学習項目リストとしての参照基準
1. 参照基準とは何か
2. 参照基準はなぜ必要か
3. 日本の大学におけるスペイン語教育
4. これまでの経緯
第2部　言語運用のための参照基準を目指して
1. 「スペイン語学習のめやす」
2. 学習項目リストとしての「めやす」から言語運用のための「めやす」へ
3. 「めやす」を適用した授業
結論にかえて

理論的基盤 (pp.13-33, 85-101) 内の目次タイトル

GIDEとしてはいかにして「めやす」が現在の形になったかも周知したいところだとは思うが、あくまでも「めやす」に書いてある内容を知ることを目的として、特徴的だと思われる部分をかいつまんで紹介する。
ざっくり言えば、
第1部では「めやす」が日本のスペイン語教育において「共通参照基準」になることを目指していること、
第2部では「めやす」を具体的にどう活かしてほしいと思って現在の形にしたか
を説明している。

6

第1部　1. 参照基準とは
　　2. 参照基準はなぜ必要？

- レベル、ニーズ、関心
- 「何のために教えるのか」「何を教えるのか」「どのように教えるのか」「どう評価するのか」に答えるもの
- コミュニケーション能力や一般的能力の向上を自ら図れる自律した学習者を育てるために、一般に共通する基準が必要
- 学習を続けるための参考とすることができ、学習の継続が保証される
- 授業で学んだ方法論によって一生の間学び続ける学習者を育てる

まず第1部の内容である、「どういう考え方に基づいて「めやす」が作成されたか」。

「めやす」で使用されているいろいろなキーワード・キーフレーズをスライドに挙げたが、
コミュニケーション能力や一般的能力の向上を、これから生きていく中でいつでも自ら図れる自律した学習者を育てたい。(p.86)
そのために、教える側も学ぶ側も参照できる、共通の「参照基準criterios comunes」が必要だ。
授業で学んだ方法論によって一生の間学び続ける学習者を育てることができる。

7

第1部　3. 日本の大学におけるスペイン語教育

- アンケート結果
  「スペイン語圏の人々と意思の伝達ができる可能性」
  「文化への関心」
- 日本語とスペイン語の言語的差異 → 文法重視〇
- 文法知識の片側通行的な受け渡しに終始 → 学生の動機づけに悪影響
- 外国語（スペイン語）を学ぶのは、彼らの認知能力を向上させ、人生をより豊かにするために役立つのだということを、伝えられていない
- 文法とコミュニケーションのどちらかを選択させるものではなく、その重要性の位置づけを変えようという試み

2010年にGIDEが40の大学で実施したアンケートでは、多くの学生が「スペイン語圏の人々と意思の伝達ができる可能性」「文化への関心」を理由にスペイン語を選択している。
その学生たちに、文法知識伝授一辺倒のような授業をすると、学生側は「期待していたのと違う」「いつになったらコミュニケーションできるようになるのか」と徐々に学習へのモチベーションが下がっていく。

日本語とスペイン語の言語的差異を考慮すると、文法に重きを置くことは理にかなっている。(p.87)
だがそのアプローチは、昨今の学生の要求とマッチしない。

我々教師側が、外国語（スペイン語）を学ぶのは、彼らの認知能力を向上させ、人生をより豊かにするために役立つのだということを、伝えられていないことが、学生の動機減退の大きな要因。

「めやす」は、日本の大学におけるスペイン語教育において、文法を教えるのをやめてコミュニケーションだけ前面に押し出して教えましょうと言っているわけではなく、文法とコミュニケーションそれぞれの重要性の位置づけを変えようという試みである。

第2部 「スペイン語学習のめやす」

・項目の配置

社会文化項目（語用論関連）→ 機能項目 → 語彙 → 文法

・12のテーマ

・聞く・読む・話す・書く → 対人モード、解釈モード、提示モード

・評価を目標達成と結びつける

第2部の内容として、具体的な「めやす」の内容の特徴と、使い方について。

「完璧ではないが少なくとも役には立つと言えるレベルのコミュニケーション能力」という文言がある。（p.91）
「めやす」は、少なくともレベル1の段階においては、言語体系を理解したりすることよりも、上記を目指して授業を行うべきだと考えている。
文法が言語の教育・学習における中軸であるべきではなく、機能的でコミュニカティブなアプローチを考えなければいけないと書いてある。

そこで、まず「めやす」の特徴1点目として、項目の配置をこのように。
この順番は「めやす」のかなめで、実際に「めやす」を教案づくりにいかす際にポイントとなる。

「社会文化項目」とは、いわゆる小文字のculture に関連する項目と考えてよさそうだが、言語を超えた生活様式や価値観を含んでいる。そしてここには、語用論的な側面も含まれ、異文化間コミュニケーション能力を育成することを目標としている。
この「社会文化項目」から出発するというのは、文化について最初に明示的に説明しましょうという意味ではない。
また、文法的正しさにのみ執着するのではなく、「コンテクストにおける適切性」という概念を導入し、語用論に関わる項目も初級段階から少しずつ学習させるべきだという考え方。

そして、コミュニケーションを目標として、機能項目を設定していく。
大事なことは、「何かをするためのスペイン語を教える」ということ。

具体例を挙げると、

例えば「生活習慣」という社会文化項目からスタートするなら、その場面におけるコミュニケーションを想定して、「習慣について情報を求める・与える」ことや「仕事と勉強について情報を求める・与える」ことを機能項目として挙げる。こういう機能を持つ表現が「生活習慣」に関連するコミュニケーションに必要であるということ。
そしてその機能を持つ表現には、必然的に必要な語彙と文法事項がついてくる。

2点目に、学生のニーズを考慮して、12のテーマを設定しているが、
これは単なる例示で、自由に設定していい。
とにかく最重要なのは、前述の通り、必ずコミュニケーション機能と文法がセットになって示されること。

「めやす」の3点目の特徴は、従来の4技能を、コミュニケーション機能の観点から3つのモードに分類して捉えていること。
行為そのもので分類するのではなく、行為によって果たされる機能によって分類している格好になる。

また、「めやす」は、評価が目標達成と結びついている必要性を強調している。
学習者には先に到達すべきレベルや目標を伝えておくべきだし、学習者は最初から何が求められているのかを知らなければいけない。

9

「めやす」の使用方法 (p.82より)

1. 与えられた教材がない場合
2. 文法重視の教材が与えられている場合
3. コミュニケーション重視の教材が与えられている場合

以上の内容に基づき、「めやす」は、日本の大学のスペイン語教育現場における状況として例えばこの3パターンを想定して、「めやす」をもとに実際にどう教案を作ったらいいか、具体的手順を紹介している。
つまり「めやす」はこのどれにも対応できるということ。

10

「めやす」の使用方法 (p.82より)
2. 文法重視の教材が与えられている場合

- 目標とする文法項目が、どのテーマの中に現れるか探す
- 文法知識のみが達成目標にならないよう、運用を考慮してコミュニケーション目標を参照する
- 教えるべき基本内容を確認する（目標レベル以上の内容を教えない）
- 文法項目を機能・文化・語彙の各項目と関係づける
- モデル文を参照して例文や練習問題を考える

試しにパターン2の「文法重視の教材が与えられている場合」を考えてみる。
大学から教科書が指定されており、それが従来型の文法シラバスに則った教科書であるという場合などがこれに当たる。

まずありがちなのが、第1課で文字や発音が、第2課で名詞や冠詞が導入され、第3課でserとestarなどの動詞が紹介されるというパターンかと思うが、
例えば冠詞を教えたいと思った時に、文法項目の表で定冠詞と不定冠詞を見るとテーマ3に印がある。そこでテーマ3のページを参照しながら、「冠詞を教える」ことのみが達成目標にならないよう、「実際の運用において冠詞はどう使われるのか」を考慮しながら、コミュニケーション目標を決める。
例えば「行きたい場所がどこにあるか尋ねる・説明する」という対人モードで行こう、というようなことを決める。

さらに、学習者が初級の段階であれば教えるべき内容はレベル1に制限されているべきであることを肝に銘じて、難しいことにまで波及しないよう心掛ける。冠詞などは学習の段階に応じていくらでも複雑な用法説明ができそうな項目だが、とにかく初級段階で何がわかればいいのかを明確に

しておく。
余計なことを教案に盛り込まない。
逆に言えば、学習者のレベルがすでにかなり高い状態であっても、冠詞の学習はできるわけで、その際にはレベル3や4の想定で目標設定をするということ。

その上で、冠詞という文法項目を、機能・文化・語彙の項目と関係づけていく。定冠詞は「特定の何かの位置関係について情報を求める・与える」時に使う、不定冠詞は「不特定で種別だけ指定したようなものがあるかないかについて情報を求める・与える」時に使う、というようなことを考える。

最後に、モデル文を参照して、導入に使う例文を考えたり練習問題を作ったりする。

こうすることで、一方的な文法規則の解説や、コンテクストのない単文の穴埋め問題のみに終始することなく、学習者が今学習している項目が何に活かされるのかが見える状態を作り出し、モチベーションを減退させることなく学習させることができる。

「めやす」が強調しているのは、
・コンテクストを意識して、コミュニケーションを目的とした「機能」を示す必要性
・限られた授業時間ですべて教え切ることを目標とするのではなく、授業が終わった後も学生が自主的に自立的に学習を続け進んでいくことを目標とすること